

第6学年 体育科 学習指導案

令和2年11月20日（金） 第6校時 運動場

1 単元名 「トン・1・2・3 ミスプロ杯！」 （ハードル走）

2 運動の特性

(1) 一般的特性

- 一定の距離を置いたハードルをリズムカルに走り越える運動である。
- 記録に挑戦したり、友達と競走したりすることが楽しい運動である。

(2) 児童から見た特性

ハードル走の楽しさや喜びを感じる要因	ハードル走を遠ざける要因
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムカルに走り越すことができたとき ・自分やチームの記録が伸びたとき ・競走に勝ったとき ・記録の伸びが友達や先生から認められたとき 	<ul style="list-style-type: none"> ・足をぶついたり、転倒したりして、痛みや恐怖を感じたとき ・ハードルを上手に走り越せないとき ・記録が伸びないとき

3 児童の実態

(1) 知識及び技能

【体育に関する意識調査より】（調査日：令和2年7月28日 調査人数 名）

・ハードルはどのように走り越えたらよいでしょう。	
○前足を伸ばし、後ろ足を曲げる	人
○低く跳んだほうがいい	人
○リズムよく跳ぶ	人
○足を高く上げる	人
○足の裏を見せるようにする	人
○高く跳ぶ	人
○よくわからない	人

【体育に関する実技調査より】（調査日：令和2年7月28日 調査人数 名）

①スタートから最後まで、体のバランスを取りながらまっすぐ走ること	②ハードルをリズムカルに走り越えること（インターバルを3歩または5歩で走る）
できない 人	できない 人
できる 人	できる 人
できない児童の実態	
<ul style="list-style-type: none"> ・大幅な減速からまたぎ越そうとする。 ・上体が上に伸びたまま跳んでいる。 ・足を前に突き出さず、ひざが曲がったまま跳んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハードルの前で歩幅を調整してまたぎ越える。 ・歩数が合わず振り上げ足さ左右バラバラである。

5年生までのハードル走の学習を振り返るためのアンケートをとったところ、「ハードルはどのように走り越えたらよいでしょう」の問いに対して、「上に跳び上がらないほうがい

い」や「低くとんだほうがいい」等運動の行い方に関する回答が %であった。また「わからない」の回答が %、リズムについて触れた回答は %であった。このことから、よりよい記録を出すための方法について今までの既習事項から児童なりの考えはもっているが、リズムカルに走り越えることへの必要感や知識の定着が見られていないということが分かった。実技調査の結果より、 の児童が「体のバランスをとりながらまっすぐ走る」がよくできていた。「できない」と評価した の児童は、上に高く跳び越したり、スピードに乗らないまま跳び越えようとしたりすることでハードルが足に引っ掛かりバランスを崩してしまった。着地後に頭が左右に大きく振れた児童も「できない」と評価した。

ハードルをリズムカルに走り越えること（インターバルを3歩または5歩で走る）ができた児童は全体の %である。今回の調査では、インターバルを固定したため、気持ちよく走ることができなかつたとも考えられるが、「できない」と評価した児童は、ハードルの前で歩幅、歩数を調整してまたぎ越えようとするのが原因で、リズムカルに走り越えることができなかった。技能調査から、「決めた足で踏み切ること」、「体のバランスを取りながらまっすぐ走る」等の技能を段階的に習得できる単元計画を作成する必要があると考える。

(2) 思考力、判断力、表現力等

1学期の「走り高跳び」の学習において、自己の技能だけでなく、チームの仲間の技能を高めようと励まし合う児童の姿が多く見られた。タブレット端末で撮影し合い、課題を解決しようとする姿も見られた。意識調査の「体育が好き」の理由として、「教え合って上手になれるから」と答えた児童が 名いることから協力して学ぶことのよさを実感している児童が多いことが分かる。しかし、チーム内で「がんばれ」や「よかったよ」と肯定的な声掛けはあるものの、「上に向かって跳んでいるからもう少し遠くから踏み切るようにしてみて」のようなポイントを絞った具体的なアドバイスが少ないのが現状である。タブレット端末で撮影し合うことに満足してしまい、個人で繰り返し局面を見返したり、友達へのアドバイスの根拠として活用したりする姿が少ないことも課題と言える。教え合いの内容が明確でない分、自分の課題や上手くいかない原因を認知していないまま課題解決の時間を迎えてしまう児童も見られた。

(3) 学びに向かう力、人間性等

【体育に関する意識調査より】（調査日：令和2年7月28日 調査人数 名）

調査項目	好き	好きではない
①体育の学習は好きですか。	人	人
②ハードル走の学習は好きですか。	人	人
(記述式)		人
○好きな理由	○達成感があるから	人
	○跳び越えることが楽しいから	人
△否定的な理由	○たくさん走れるから	人
	△転ぶと痛いから	人
	△転ぶのが怖いから	人
	△上手く跳べないから	人

③ハードル走の学習で心配なことはありますか（記述式）	
<ul style="list-style-type: none"> ・ケガをすること ・転ぶこと ・歩数が合わないこと ・上手くできなくてチームで責められるかもしれないこと ・転ぶ人が多くて暗い雰囲気になること ・チームに迷惑をかけてしまうこと 	人 人 人 人 人 人
④ハードル走の学習で楽しみなこと、がんばりたいことはなんですか（記述式）	
<ul style="list-style-type: none"> ・転ばずに跳べるようになること ・歩数ピッタリで走り越すこと ・怖がらず走れるようになること ・少しでも早くゴールできるようになること ・1番早く走ること 	人 人 人 人 人

本学級の児童は、「体育は好きですか」という質問に対して、 人（ %）の児童が「好き」と答えている。このことから日々の体育の学習に前向きに取り組んでいる児童が多いことが分かる。それと比べてハードル走の学習が好きではないと 人（ %）もの児童が回答しており、苦手意識をもっていることがわかった。理由として、転んだ経験があったり、足が引っかかる恐怖心があったりするところが最も多く、ハードルを走り越える楽しさを感じられていないと考えられる。心配なこともハードル走が好きになれない理由と同じで、転ぶことに対する恐怖という回答が最も多い。しかし、友達に勝ちたいという競争心や、ハードル走の基本的技能を身に付けたい気持ち、向上させたい気持ち、よりよく運動したいという前向きな気持ちももっている。

4 教師の指導観

（1）知識及び技能

本学級の児童の実態より、身に付けさせたい動きは以下の2点である。

- ①スタートから最後まで、体のバランスを取りながらまっすぐ走ること
- ②ハードルを3歩または5歩でリズムカルに走り越えること

この2つの動きについて、教師から教え込むのではなく児童が主体となって考えながら身に付けさせたい。第1時のオリエンテーションでは、学習の進め方や学習カードの使い方を共有した後、すぐに試しのレースを行う。走った後に、児童から現状の課題と解決するために何が必要なかを交流させる。教師や児童同士のやり取りの中で、自分たちに必要な練習（感覚づくりの運動）を決めさせる。感覚づくりの運動では、第1ハードルを決めた足で踏み切ることと「トン、1、2、3」のリズムの定着を目指す。

第3、4時は、ハードル走に必要な基本的な知識・技能を習得するための時間とする。習得を目指す技能を絞ることでより確実な定着を目指す。具体的には、①「トン、1、2、3（4、5）」のリズムでハードルを走り越えること②バランスを保ち最後まで走り越すことである。それぞれの時間で技能のポイントを明確に示し、全体に共有したい。

（2）思考力、判断力、表現力等

意識調査の結果から、関わり合いを通して自分や仲間の課題を解決することができる機会を意図的、計画的に設けたい。本学級には「自分の動きの課題」や「友達の動きのどこを見たらいいか」がわからないことが原因で、具体的なアドバイスが少ないという実態がある。第2時では、自分のインターバルを決める。第2時のめあては個人で達成できる内容ではあるが、児童の気付きやつぶやきを学級全体に広げたり問い返したりすることで、自己や友達の動きの課題、改善方法などについて話しやすい雰囲気をつくりたい。第5時では自分の課題を発見する時間を設ける。前時までに学習した技能を生かし、プレ記録会を行う。プレ記録会を通して、児童一人一人に自分の課題が何であるかを明確に掴ませたい。第6時では、課題が共通している友達同士でグループを作り、課題を解決させたい。

「リズムに課題があるならインターバルや口伴奏」「バランスを保つことに課題があるならタブレットで頭の位置を確認」のように視点を絞ることで「できた・できない」の評価をしやすくし、加えて「そのために今の位置よりもう少し遠い位置から踏み切ってみて」のような具体的なアドバイスができていた児童を取り上げて広め、教え合いの質を高めたい。

また、毎時間の最後には「締めの本」の時間をつくる。第5、7時の記録会は第1時と比較したときのタイムの伸びや友達との競走、練習の成果を実感させたい。第1、2、3、4、6時の記録会は「本時のめあてが達成できたかどうか」を振り返るための1本とする。

学習カードの形式についても工夫したい。めあてに沿った振り返りを書くことができない児童もいる実態から、「自分の課題は何ですか」「解決するためにはどのような練習が必要だと思いますか」のような質問形式で振り返りを行う。本時のめあてに沿った振り返りを行うことで何を学んだのか児童自身が認知し、「次はこうしたい」と次時への見通しを明確にもたせることができると考える。

(3) 学びに向かう力、人間性等

大きなねらいとして、「ハードル走が好きではない」児童にハードル走の一般的特性や運動のよさを味わわせることで、「ハードル走が楽しい」と感じさせたい。意識調査の結果から、まずは、児童のハードルに対する恐怖心を取り除かなければならないと考えた。そこで単元前半は、足に当たっても痛みがなく、引っかかっても転倒しづらい一部分が開くフレキハードルを用いて学習を進める。また、本単元では、ゴールを2つ設定した。1つは、「ミスプロ杯」。40m走のタイムにいかにか迫ることができるか友達と競走し、縮めたタイムを競うものである。もう1つは、第1時の試しのレースで計測したクラスの合計タイムからいかにか削ることができるか全員で挑む目標である。個人で記録を追うことに加え、仲間と協力し、自分の頑張りがクラスの記録の伸びに寄与する仕組みを作る方が、意欲付けに効果的であると考えたためである。感覚づくりの運動から仲間と共に学習を進める意識をもたせ、課題発見・解決の時間を中心に、個人に対する声掛けはもちろん、「あなたのアドバイスがあったから〇〇さんのタイムが伸びた」というように関わり合い自体を価値付ける声掛けもしていきたい。

(4) 研究課題との関わり

研修主題 「生きる力を培う活力ある児童の育成」
～自ら考え、協働し、課題解決を目指す児童の育成～

高学年の目指す児童像

①	自ら進んで学習し、学習の楽しさや喜びを味わうことができる子
②	関わり合いを通して自分や友達によさに気づき、仲間と共に高め合うことができる子
③	試行錯誤を重ねて、課題を解決することができる子

目指す児童像を具現化するために、次のような仮説を立て、手立てを考えた。

【仮説1】 児童にとって必要感のある学びとなるよう学習過程を工夫すれば、自ら課題をもち進んで学習に取り組むことができるであろう。

○児童の思考の流れに沿った単元計画の作成

児童にとって必要感のある学びを実現させるためには、教師が一方的に学習のねらいを与えるのではなく、児童が主体となって学習のめあてをもつことが効果的であると考え。第1時のオリエンテーションでは、「試しのレース」を行う。そこで上手いいかないポイントを児童から引き出すことで単元を通して身に付けたい技能、今の自分に足りないものや授業を通してなりたい姿を明確にする。また、1時間をぶつ切りにせず、本時の振り返りの内容を次時のめあてにつなげる。児童自身が上手いいかないポイントとして挙げた課題について授業を通して解決していくスパイラルをすることで、児童は主体的に学び、ハードル走の楽しさや喜びを味わうことができると考える。

【仮説2】 児童が自力解決や協働しながら課題解決できるよう指導法を工夫すれば、思考力・判断力・表現力を高めることができるであろう。

○仲間と共に高め合う課題解決学習サイクル

基礎知識・技能の習得 → 課題を見付ける → **課題解決** → 振り返る

協働しながら課題を解決するためには、意見を交流・共有することのよさや自分のアドバイスによって学びが深まったという有用感をもたせる必要がある。そのために、『トン、1、2、3』のリズムで走ることができているかのように動きを見合う際の視点を絞ることで、児童同士の教え合いの内容をより具体的にしたい。単元後半では、タブレット端末を用いて互いの動きを撮影する。動画を根拠として活用しアドバイスすることによって、教え合いの質が高まると考える。

また、課題解決のために必要な用具として、ペットボトルキャップ、タブレット端末などを使う。これらについても教師から一方的に紹介し取り組ませるのではなく、オリエンテーションで出た課題や前時の振り返りを確認する中で、課題解決のためにどんな学習が必要なのかを発問、問い返ししながら、児童から出てきた意見に沿って提示したい。

○体力づくりの生活化を図る教科外活動

業前に行っている8秒間走や、チャレンジカードにおける家庭での取り組みを通して、運動習慣の定着と基礎体力の向上を図っている。また、全校体育では、「フレッシュダンス」や「室内エアロビクス」などを行い、多様な運動に触れると共に、運動の楽しさを味わわせるような工夫を行ってきた。

今後は、体力テストの結果や自己の生活習慣等に関するアンケートを活用し、自己の体力や生活の課題を知った上で、どのように運動・生活習慣を見直していくのか考える経験をさせていきたい。

5 単元目標

- (1) 自分にあったインターバルのハードルを3歩または5歩でリズムカルに走り越えることができるようにする。 〈知識及び技能〉
- (2) 自己の能力に適した課題を決め、その課題を解決するための練習方法を選択し、友達と動きのポイントを伝え合うことができるようにする。 〈思考力、判断力、表現力等〉
- (3) 互いに協力して安全に練習ができるようにするとともに、自分やチームの目標に対して全力で取り組むことができるようにする。 〈学びに向かう力、人間性等〉

6 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①ハードル走の行い方について言ったり書いたりしている。 ②同じ足で踏み切って第1ハードルを走り越すことができる。 ③バランスをとりながらハードルを走り越すことができる。 ④「トン、1、2、3」のリズムでハードルを走り越すことができる。	①自己やグループの課題を見付け、課題解決に向けて、自分の力に合った練習の場や方法を選んでいる。 ②自分の課題に合った練習をし、自分や仲間の動きの変化や伸びなどのよさ、見付けた動きのポイントやコツを伝え合っている。	①自分自身の課題を知り、仲間と学習活動に積極的に取り組もうとしている。 ②勝敗を受け入れようとしている。 ③用具の使い方や練習場所に気を配り、活動を安全に行っている。

7 単元計画

(1) 領域（走・跳の運動、陸上運動）の取り上げ方

運動／学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	中1中2	中3
短距離走・ リレー系	6	6	6	6	5	6（選択）
ハードル走系	6	6	7	7	6	
走り幅跳び系	5		7		6	6（選択）
走り高跳び系		5		7	6	

(2) 領域の内容（小型ハードル走、ハードル走）と目指す動き

学年	教材	目指す動き
3	小型ハードル走	いろいろなリズムで小型ハードルを走り越したり、自分に合ったリズムで走り越したりすること
4	40m小型ハードル走	いろいろなコースでリズムを感じながら小型ハードルを走り越したり、競走したりすること
5	40mハードル走	高さのあるハードルを3歩のリズムで走り越えること
6	40mハードル走	自分に合ったインターバルを見付け、3歩または5歩でリズムカルにハードルを走り越えたり、競走したりすること
中1・中2	50～100mハードル走	ハードルをリズムカルな走りから滑らかにハードルを越すこと
中3		スピードを維持した走りからハードルを低く越すこと

(3) 指導と評価の計画 (7時間扱い) 本時は○印 6 / 7時

時	1	2	3	4	5	⑥	7	
ねらい	○ハードル走の行い方を知り、学習の見直しをもとう。	○決まった足や歩幅で走り越えられるコースを選ぼう。	○リズムよくハードルを走り越えよう。	○バランスをとってハードルを走り越えよう。	○ブレ記録会を通して自分の課題を見付けよう。	○自分の課題に合った場で練習し、ポイントやコツを伝え合おう。	○学んだことを生かしてミスプロ杯を楽しもう。	
指導の内容	・学習の進め方 ・準備の方法 ・記録会の行い方 ・学習カードの使い方	・安全な準備の仕方 ・1台目までの歩数 ・インターバルの歩数	・「トン、1、2、3」のリズム	・踏み切り位置の調整	・自己や友達の課題の見付け方 ・課題解決のための練習方法の決定	・課題解決のための練習 ・同じ課題をもつ友達へのアドバイスの仕方	・これまで学習してきた事を生かした記録の測定 ・リズムカルに走り越えるための技能ポイントの確認	
学習過程	1 集合、整列、健康観察、挨拶をする。 2 準備運動をする。							
	〈オリエンテーション〉 3 単元のゴール、学習内容、本時のねらいを確認する。	3 感覚つくりの運動をする。 ①第1ハードル走…第1ハードルを決めた足で走り越えられるようにする。第1ハードルまでを全力で走るようにする。 ②ミニハードル走…ミニハードルをリズムよく走り越し、感覚を養うようにする。3m×4台 4 本時のめあてを確認する。 ※第1時や前時の振り返りを基にし、児童と共に本時のめあてを設定する。						
	4 学習の仕方や進め方に見直しをもつ。 ・用具の確認 ・準備の仕方 ・学習カードの書き方	5 共通課題学習をする。		5 課題別学習をする。				
	5 試しの記録会をする。 ※自分たちの実態を知り、現状の課題や必要と思う技能について気付かせ、これからの学習につなげる。 ・記録会のローテーションの確認 ・撮影方法の確認	①歩幅を合わせてハードルを走り越えよう。	②ハードルをリズムカルに走り越えよう。	③バランスをとってハードルを走り越えよう。	ブレ記録会を通して自分の課題を見付けよう。	自分の課題に合った場で練習し、ポイントやコツを伝え合おう。	6 記録会を行う。 ・掲示版や学習カードを活用しながらハードル走のポイントを確認する。 ・練習を行い、記録会を行う。 ・自分の全力を出して取り組ませる。	
	6 感覚つくり運動の確認をする。 ・試しのレースを基にどんな練習をしたいか考えた上で紹介する。 ①第1ハードル走 ②ミニハードル走 7 後片付けをする。 8 本時のまとめをする。 9 整理体操、挨拶をする。	※安全ですばやい準備の仕方について確認する。 ※タイムを縮めたい、踏み切りの足が左右バラバラであることに違和感があるという振り返りの記述を基にめあてを設定する。 ※歩幅を調整するという発想を変え、自分の歩幅に合ったインターバルを見付けることを意識させる。	※既習事項を確認し、ハードル間が3歩または5歩であること、「トン、1、2、3」のリズムについても確認し、互いの動きを見合う際の視点とする。 ※「トン、1、2、3」のリズムが上手いかなは友達と口伴奏で合わせたり、ミニハードルで確認したりすることで定着を目指す。	※ハードルを走り越す際に上に跳び上がってしまうという振り返りを基にめあてを設定する。 ※第1時で撮影した自分の動きを基に踏み切り位置と頭の高さの関係性に気付かせ、遠くから踏み切ることを意識させる。 ※ペットボトルキャップを使い、踏み切り位置が視覚的に分かるようにする。	※ブレ記録会は自分の課題を見付けるために行うこと、最後の記録会のために行うことを確認する。 ※以下から次時の課題を選択できるようにする。 ①決まった足で走り越える。 ②リズムカルに走り越える。 ③踏み切りの位置を調整する。 ※自分の動きの課題を見付けることができない児童には個別指導に入り、課題を見付けられるようにする。	※前時のブレ記録会で見付けた個人の課題を確認する。 ①決まった足で走り越える。 ②リズムカルに走り越える。 ③踏み切りの位置を調整する。 ※練習の場を選び、同じ課題をもつ人同士で練習をする。 ※各局面の動きのポイントを明確にし、アドバイスをさせる。 ※友達に対して的確なアドバイスをしている児童を取り上げ、全体に広める。	7 後片付けをする。 8 めあてに沿った振り返りをする。 ・単元を通して身に付けた力や全体の感想などを発表する。	
	6 記録会を行う。		6 タブレット端末を用いて自分の動きを確認し、課題を見付ける。			6 記録会を行う。		
	7 後片付けをする。 8 本時の振り返りをする。 9 整理運動、挨拶をする。							
評価計画	知・技	①	②	③			④	
	思・判・表		①			①	②	
	態	①	③			②	②	
	方法 場面	観察・学習カード 4, 6	観察・学習カード 5, 6	観察・学習カード 5, 6	観察・学習カード 5, 6	観察・学習カード・タブレット 5, 6	観察・学習カード・タブレット 5, 6	観察・学習カード 6, 8

8 本時の学習と指導（6/7時）

（1）ねらい

自分の課題に合った練習をし、自分や仲間の動きの変化や伸びなどのよさ、見つけた動きのポイントやコツを伝え合うことができるようにする。

〈思考力、判断力、表現力等〉

（2）準備

- ・ハードル ・ビブス ・ストップウォッチ6個 ・カラーコーン タブレット端末
- ・ミニハードル ・ケンステップ ・ペットボトルキャップ ・掲示板 ・学習カード

（3）展開

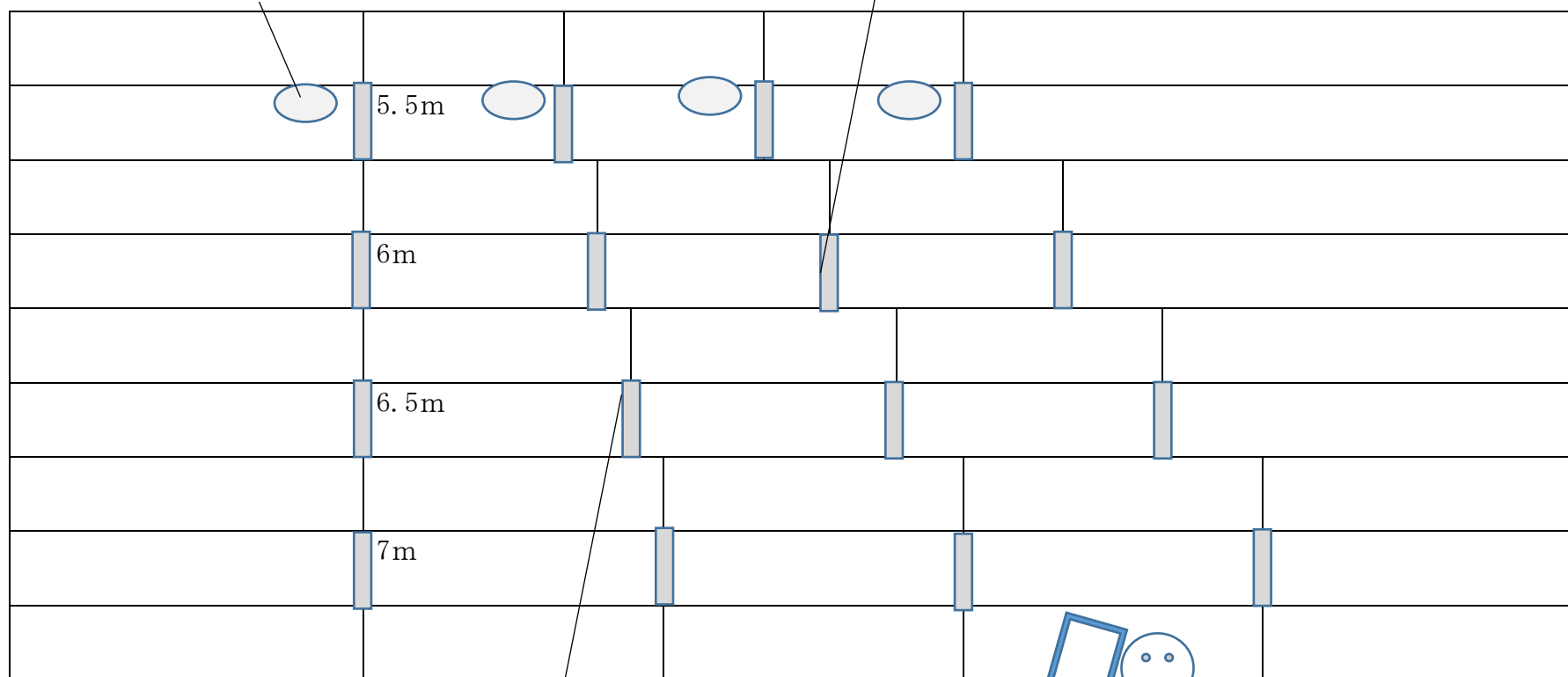
段階	学習内容・活動	指導上の留意点（○指導 ◆評価規準） ◇小中一貫の視点
導入 10分	<p>1 集合、整列、健康観察、挨拶をする。</p> <p>2 準備運動をする。 (投力向上運動を含む)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>【投力向上運動】 シャドー ピッチング（セット、指差し、足上げ、ビュンッ!）</p> </div> <p>3 感覚づくりの運動をする。 ①第1ハードル走 ②ミニハードル走</p>	<p>○事前に石けんで手洗いを行い、ソーシャルディスタンスを意識させ、集合させる。</p> <p>○服装を整え、気持ちよく挨拶して始められるようにする。</p> <p>○一つ一つの動きを丁寧に行えるよう指導する。</p> <p>○安全に気を付けて準備をしている児童を称賛し、全体に広める。</p> <p>○役割分担し、スムーズに準備ができるようにする。</p> <p>○主運動につながるポイントを意識できるように個別、全体に声をかける。</p> <p>○「第1ハードル走」では、第1ハードルまで全力で走り、常に決めた足で走り越えることができるようにする。</p> <p>○「ミニハードル走」では、「トン、1、2、3」のリズムを養うことができるようにする。</p>
展開 28分	<p>4 本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> <p>自分の課題に合った場で練習し、ポイントやコツを伝え合おう。</p> </div> <p>5 課題別学習をする。</p> <p>①決まった足で走り越える。 ・友達との見合い、タブレット端末での撮影を通してインターバルやリズムの再確認をする。</p> <p>②リズムカルに走り越える。 ・「トン、1、2、3」のリズムを意識して走り越すことができるようにする。上手くない児童については</p>	<p>○プレ記録会を通して分かった課題や前時の振り返りを確認し、本時のめあてにつなげる。</p> <p>○前時で分かった自分の課題について確認し、課題解決の場を選ばせる。</p> <p>○選ぶ課題を1つにすることで動きのポイントやアライメントの視点を絞り、教え合いがしやすいようにする。</p> <p>○必要な児童に対して、タブレット端末を活用させ、自分の動きを確認することで教え合いや課題解決のヒントとして振り返ることができるようにする。</p> <p>○撮影の仕方についても「踏み切る位置を確認したいなら、試技者のつま先からハードルまでの距離が分かる位置」のように具体的にし、共通理解を図る。</p> <p>○自分に合った課題の練習場所で練習に取り組んでいる児童を称賛し、広める。</p> <p>○課題を見付けることができているものの、意識しな</p>

	<p>友達と口伴奏で合わせたり、ミニハードルで確認したりすることで定着を目指す。</p> <p>③踏み切り位置を調整する。 ・ペットボトルキャップで踏み切り位置の確認、より遠くから踏み切ることでハードルを走り越す感覚を養う。</p> <p>6 記録会を行う。</p>	<p>がら動くことが難しい児童には、個別の支援に入り、意識する体の部位を絞るよう指導する。</p> <p>○共通の課題を選択した児童の中でグルーピングし、走者、アドバイス、撮影など役割分担させローテーションで行わせる。</p> <p>○視点を絞ったアドバイスをしている児童を称賛し、広める。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>◆自分の課題に合った練習をし、自分や仲間の動きの変化や伸びなどのよさ、見つけた動きのポイントやコツを伝え合うことができるようにする。(観察・学習カード)【思考・判断・表現】</p> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>△努力を要すると判断される状況 (C) の児童への指導の手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ・掲示物や学習カードを参考に、自分や友達の課題を適切に把握させる。 ・グループ毎の見るポイントを再度確認した上で動画を見て、よくできている点と改善点を話し合わせる。 <p>◎十分満足できると判断される状況 (A) の児童の具体的な姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の動きの課題を正確に把握して練習している。解決するための手立てやポイントについて根拠をもって伝えることができる。 ・友達の動きの課題を見付け、解決するための具体的な手立てや、それにつながるコツを伝えることができる。 </div> <p>◇視点を絞ることやタブレットを活用すること、友達の動きをどこで見るかを考えることを通し、仲間の課題や出来栄を伝えることの素地をつくる。</p> <p>○本時の学習のまとめ、次時につながる1本という意識をもたせ、緊張感をもたせる。</p> <p>○よい動きをしていた児童、友達を応援していた児童を称賛し、広める。</p>
<p>整理 7分</p>	<p>7 片付けをする。</p> <p>8 本時の振り返りをする。</p> <p>9 整理運動、挨拶をする。</p>	<p>○安全に気を付け、すばやく行うようにさせる。</p> <p>○めあてに沿った振り返りが行えるようにする。できるようになったこととその理由を明確に書かせるようにする。</p> <p>○教え合いを通した新たな気付きについての記述を全体で共有する。</p> <p>○怪我がないか確認し、よく使った部位を意識しながら行うようにする。</p> <p>○授業後、手洗いを確実にを行うようにする。</p> <p>○次時は最後の記録会であることを確認し、意欲付けを図る。</p>

9 場の設定

・ペットボトルキャップで踏み切り位置の調整をする。

・決まった足で走り越すことができているかを確認する。



・リズムカルに走り越えることができているかを確認する。

・タブレット端末で撮影し、アドバイスや振り返りに活用